貙袋遺跡第２次調査

谷地　薫（秋田県教育庁払田柵跡調査事務所）

１　調査要項

遺 跡 名：貙袋遺跡（まみぶくろいせき）
調査期間：令和３年11月２日～12日
調査面積：39㎡
調査機関：秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
検出遺構：溝跡３条
出土遺物：須恵器（坏、坏蓋、甕）、土師器（甕）　計　中コンテナ１箱
時　　代：奈良時代

２　遺跡の概要

貙袋遺跡は、横手市雄物川町造山地区の東端に位置する。造山地区は、北流する雄物川の右岸に形成された標高50m前後の河岸段丘上に集落の中心部や造立神社、県立雄物川高等学校等が立地し、段丘の東側に広がる沖積地には石持川が北流している。南東部の廻館地区から貙袋地区にかけては、石持川の旧河道が段丘東縁部を浸食して形成した帯状の低地帯が蛇行して南北に延びている。

貙袋遺跡は、雄物川高校と石持川の現河道の間に挟まれた南北約300m、東西約250mの範囲である。遺跡内の地形は、西側の低位面と東側の高位面に二分される。南、東、北の三方を石持側に囲まれた標高49～50mの高位面は、西側の低位面によって雄物川高校が立地する段丘面とも切り離され、独立丘陵状の地形となっている。低位面は、南北約300m、東西70～100mの範囲で、標高約48.8mである。低位面は、段丘と高位面の間の旧河道が埋没したことによって形成された地形と推測されるが、この地形が形成された時代は不明である。

令和元年度に行った第１次調査では、高位面に３本のトレンチを設定し、溝跡３条、竪穴状遺構１基、土坑１基、柱穴様ピット22基を検出した。溝跡のうち２条は東西方向で、10mの間隔で並行する。遺物は８世紀中葉の須恵器坏、土師器坏、坩堝、土製紡錘車等が出土した。

３　第２次調査の目的と方法

第１次調査では、並行する東西方向の溝２条を検出したが、貙袋遺跡の東側に位置する東槻遺跡では、平成19年度の調査で同様の並行する東西方向の溝２条を検出しており、溝の間隔もほぼ同じであった。東槻遺跡で検出した溝跡と、石持川の現河道を挟んで西側の貙袋遺跡で検出した溝跡の位置を図上で結ぶと、２条の溝が10m間隔で並行してほぼ東西に延びていることが予想された。そうであれば、奈良時代の東西道路の側溝である可能性も考えられる。

第２次調査では、この東西方向の溝跡が第１次調査での検出地点よりさらに西側に延び、造山集落が立地する段丘上にまで達しているのかどうか、その際、高位面と段丘の間にある低位面においても地形の起伏にかかわらず溝が掘削されているのかどうかについて確認することを目的に、トレンチ調査を行った。高位面では、第１次調査のN－３トレンチの西約60mの地点に1トレンチ（長さ17.3m×幅1.5m）、低位面ではさらにその西約75mの段丘直下に２トレンチ（長さ11.3m×幅１m）、計２本の南北トレンチを設定した。

４　基本土層

高位面の１トレンチ、低位面の２トレンチともに、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：客土、Ⅲ層旧表土（黒褐色土）、Ⅳ層：地山漸移層（暗褐色土）、Ⅴ層：地山（褐色土）である。

１トレンチは、南半部で削平が著しく、Ⅰ層直下又はⅡ層を挟んで地山の褐色砂質シルト層が露出する。特に南端部付近は一部で砂礫が露出していた。中央部から北半はⅤ層上面が北側に緩く傾斜しており、Ⅱ層下面とⅤ層上面の間にⅣ層が残る。最も北寄りではⅣ層上にⅢ層も一部に残っている。

２トレンチは、北端部で削平がⅤ層に及んでいるものの、全体にⅢ層・Ⅳ層が残る。Ⅴ層上面が北側に傾斜し、北側ほどⅢ層が厚く堆積している。

５　検出遺構と出土遺物

１トレンチで溝跡１条（ＳＤ１）、２トレンチで溝跡２条（ＳＤ２、ＳＤ３）を検出した。ＳＤ２溝跡検出面からまとまった量の須恵器破片が出土した。

ＳＤ１溝跡

高位面の１トレンチ中央部、トレンチ南端から約11ｍ北側で検出した。溝跡の南側はⅤ層まで削平が及んでいて、Ⅴ層上面での検出であるが、北側はⅣ層が残っており、Ⅳ層上面で溝跡の輪郭を確認した。東西方向の溝跡である。両側の壁面、底面ともに平坦で、断面形は逆台形を呈し、底面から上面に向かって直線的にやや開く。南壁よりも北壁のほうが立ち上がりの傾斜がやや緩い。上端幅90～110cm、下端幅70cm、深さは55cmである。

埋土下部は、上部壁面の崩落によると推定される地山ブロックを多く含む褐色～黒褐色土、埋土上部は旧表土の流入と推定される黒褐色土で、いずれも自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ２溝跡

低位面の２トレンチ南側、トレンチ南端から約４ｍ北側で検出した。溝跡の南側はⅤ層まで削平が及んでいてⅤ層上面での検出である。北側はⅢ層・Ⅳ層が残っていたが、Ⅲ層上面では輪郭がわずかに見えるものの不明瞭で、Ⅳ層上面で明瞭な輪郭を確認した。東西方向の溝跡である。両側の壁面、底面ともに平坦で、断面形は逆台形を呈し、底面から上面に向かって直線的にやや開く。南壁、北壁ともに同程度の傾斜である。上端幅95～110cm、下端幅75～85cm、深さは35cmである。

埋土は、上部壁面の崩落によると推定される地山ブロックを多く含む黒褐色土で自然堆積である。Ⅲ層上面の遺構検出面から埋土最上層中で須恵器破片がまとまって出土した。多くは甕であるが坏２点、坏蓋２点も含まれる。甕は接合して大破片になったもののほか、５個体前後の小破片が混在している。

坏は、器高3.9cm、底径9.0cm、底面は回転糸切り後に周縁をヘラケズリ調整している。坏蓋は、つまみ部の直径3.3cm、中央部がへこむボタン状の形態で同一個体の端部から推定した直径は24cmである。甕の頸部には３本一組の櫛歯状工具による３段の波状文が巡るものがある。

ＳＤ３溝跡

低位面の２トレンチ北側、トレンチ南端から約８ｍ北側で検出した。検出面はⅢ層上面である。Ⅲ層・Ⅳ層を掘り込むがⅤ層には達していない。底面はやや丸みを帯び、両壁面が底面から緩やかに立ち上がる。上端幅60cm、下端幅30cm、深さは20cmである。埋土は、黒褐色土の単層で、埋め立てによる埋没と推定する。遺物は出土しなかった。

遺構外出土遺物

Ⅰトレンチでは、Ⅰ層及びⅡ層から表裏両面に横方向の刷毛目調整が施された土師器甕胴部破片、須恵器甕胴部破片、陶磁器が出土した。２トレンチでは、Ⅰ層か及びⅡ層から須恵器甕胴部破片が出土した。ＳＤ２出土のものと同一固体のものがあることから、２トレンチ出土須恵器の多くは原位置がＳＤ２埋土中で、攪乱により移動したものと推測される。

６　まとめ

ＳＤ１溝跡、ＳＤ２溝跡の規模、形状は令和元年度に検出した溝跡と大差ない。溝跡の位置を図上で確認したところ、これまでに検出していた並行する２条の溝跡との関係では、高位面で検出したＳＤ１が北側の溝跡、低位面のＳＤ２が南側の溝跡の延長線上にあることが判明した。したがって、東西方向の溝跡が第１次調査での検出地点よりさらに西側に延び、造山集落が立地する段丘近くにまで達してい

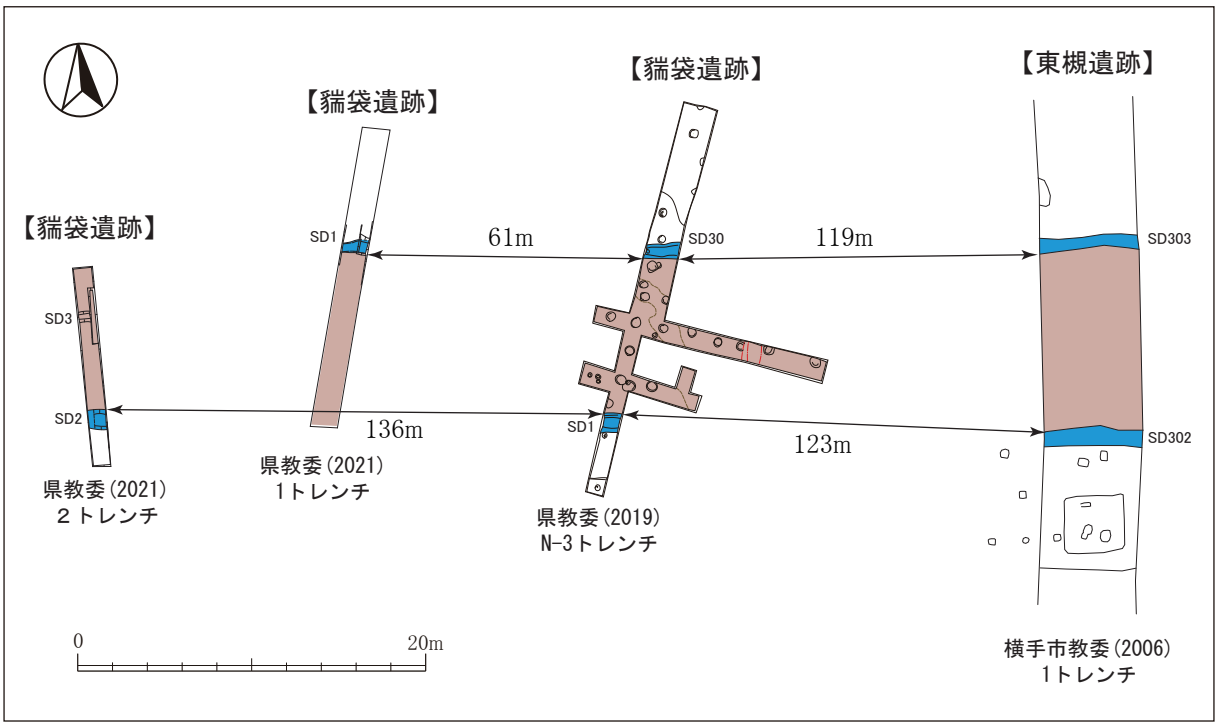
ること、高位面と段丘の間にある低位面においても地形の起伏にかかわらず溝が掘削されていることを確認できた。また、ＳＤ２溝跡出土の須恵器から、この溝が８世紀中葉～後葉には開口し機能していたことも分かった。

これまでの調査成果と合わせると、約10m間隔を保って並行する２条の溝跡が、沖積地の低地に立地する東槻遺跡から、石持側を挟んで鯔袋遺跡第１次調査地点の高位面、さらに西側の低位面を経て段丘東縁部直下まで、少なくとも約260mに渡って、自然地形の起伏に影響されずほぼ東西一直線に延びていることが想定される（第１図）。

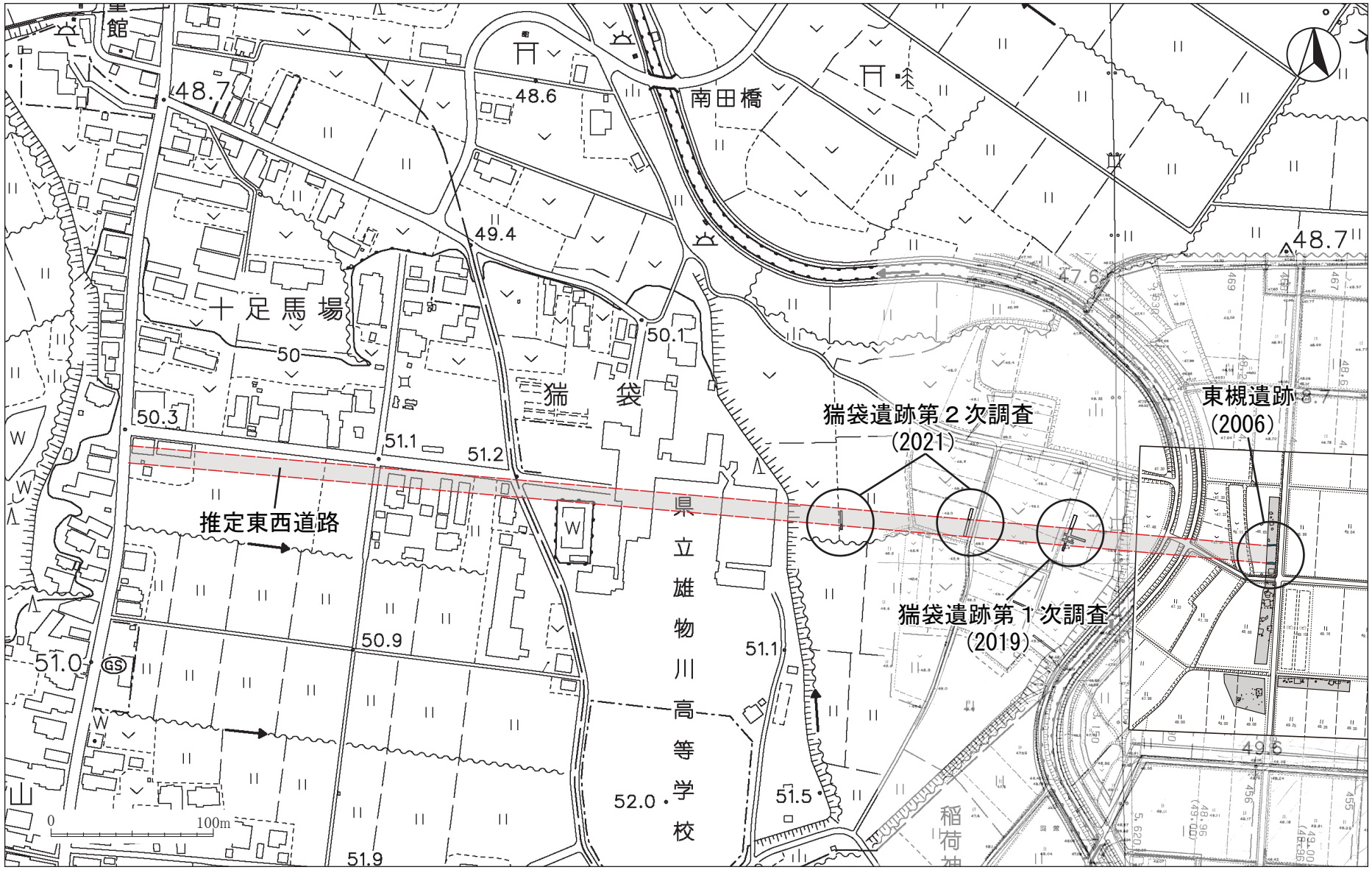
なお、高位面の１トレンチでは、ＳＤ１の南側10mの地点がＳＤ２の東側延長線上に当たるが、ここでは溝跡を検出していない。１トレンチ南端部付近で一部に砂礫層があったが、この砂礫はⅡ層の一部の可能性があり、砂礫層下に溝跡の埋土が残っている可能性がある。この地点を深く掘り下げて精査していないので、現時点では溝跡の存否の判断は保留する。また、２トレンチ北側で検出したＳＤ３は東西方向の溝でＳＤ２と並行するが、規模、埋土の状況から、Ⅱ層の客土が行われる直前にⅢ層上面に存在した小水路と推測する。

さて、奈良時代の東西方向の溝跡については、これまでも東西道路の側溝の可能性が指摘されている。本調査のトレンチでは削平がⅤ層に及んでいて、溝跡間で道路面を検出できなかったので、道路遺構の存在を直接的に証明する資料は得られていない。しかし、東西方向、自然地形にかかわらず一直線、10m間隔、延長260m以上といった特徴から、同時代の秋田城跡の例などを参照すれば、溝跡が道路の側溝である可能性は極めて高いといえる。

このような大規模で企画性のある道路を建設できる主体は在地有力者レベルではなく、律令国家の関与が想定される。官衙を結ぶ官道として整備されたとすれば、この道路の西側延長線上、雄物川の河道に至る間の段丘上に、何らかの官衙の存在が予想される。また、東西道路の西側延長線上は、造山地区を南北に貫く県道と雄物川高校を結ぶ東西道路とほぼ重なっており、現在の道路と奈良時代の官道との関連も予想される（第２図）。



第１図　推定道路遺構の概念図



第２図　溝跡検出地点と東西道路の推定位置